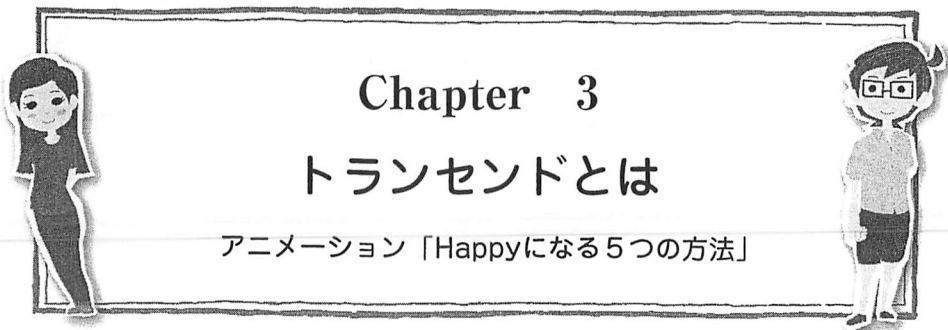




1 平和学者ヨハン・ガルトゥングによるトランセンド法とは

紛争（コンフリクト）は世界各国でいつの時代にも絶え間なく生じています。みなさんは紛争について、遠い国の出来事であって、敵対する国同士が武力をもって争い続けていることを想像しているかもしれません。けれども、国際問題に限らず、心の葛藤や、夫婦の問題やいじめなど、身近な人間関係の対立も紛争ととらえることができます。ガルトゥングは、紛争を個人内・個人間のマイクロレベル、社会内のメゾレベル、国家間・民族間のマクロレベル、地域間・文明間のメガレベルの4つに分けています。英語のconflictは日本語に一对一で対応する語がなく、そのレベルにより、葛藤（おもに個人内）、いさかい、対立（おもに個人間）、紛争（おもにマクロレベルとメガレベル）と訳されることがあります。

ガルトゥングのトランセンド法は、日本でもっとも紹介されている紛争解決法のひとつです。それは構造的暴力という概念を含め、彼自身の平和学をふまえて政治的・暴力的紛争解決に焦点をあてています。と同時に、個人的なコンフリクトも対象にしており、包括的であることが特徴です。

2 紛争（対立・争い・もめごと・いさかい）の3要件

紛争の第1の要件は、紛争には当事者（パーティー）がふたつ以上ある、ということです。そして、紛争の当事者はその紛争場面にいる当事者のみ

ならず、その周囲にも利害関係をもった当事者が複数いることが多いといえます。たとえば、東ティモールの独立問題に関する例題でも、ガルトゥングは、東ティモールの指導者やインドネシアの指導者との関係だけでなく、アメリカ・日本・オーストラリア・ポルトガルなどとの関係でとらえることを提案していました（ただし、複雑さを避けるために練習問題などでは二者関係のみをあつかうことが多い）。

紛争の第2の要件は、当事者の達成しようとしているゴールを、それぞれの当事者において明らかにすることです。このゴールの食い違いやズレによって、次に述べる対立・矛盾が起きます。

そして第3の要件は、当事者の目標（ゴール）に対立や矛盾があるということです。このような対立は、ときとして暴力による戦争に発展します。暴力的方法による紛争解決でなく、非暴力的・平和的方法による紛争転換をめざすことが大切です。

3 紛争の3要素 紛争=A態度+B行動+C矛盾・対立

紛争の要素A（態度）は、偏見や怒り・恐れ・憎しみなど当事者の心理状態を表します。この態度にも3成分があります。それは、恐れや憎しみなどの感情成分（affect）、接近や回避を求める行動傾向（behavioral tendency）、そして、正当・不当、善悪、優劣などの評価や判断をする認知成分（cognition）の3成分です。

紛争の要素B（行動）は、当事者の実際の行いです。行動には、殺人や武力行使や戦争などの暴力的な行動と、そうでない非暴力的な行動があります。ここでいう暴力的行動には、身体的暴力だけでなく、言語による精神的な暴力や性的な暴力も含まれています。トランセンド法がめざすのは非暴力的な行動による問題解決なのです。

紛争の要素C（矛盾・対立）は、目標の不一致から生じる衝突や対立の状態を表します。目標がぶつかっている状態（C）が、ゆがんだ心理的態度（A）や、暴力的行動（B）の土台なのです。したがって、一見イデオ

ロギーの対立が本質的に見えるような場合でも、その背後にある、つまり、紛争の土台にある目標の不一致による対立（C）という原点に立ち返って、紛争に対処する必要があるのです。

これらの紛争の3要素について、トランセンド法による紛争解決では、A（態度）における「共感」、B（行動）における「非暴力」、C（矛盾・対立）における「創造性」の3つを重視しています。



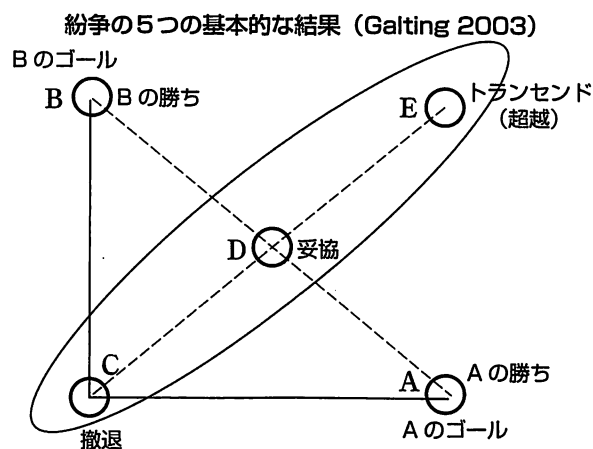
4 勝ち負け（ウィン・ルーズ）の競争的発想を超越して協同的発想へ

伝統的な紛争解決理論には、当事者間の対立を綱引きのように赤組と白組がたがいに有利なように引っ張りあう状態から妥協点を見いだすという考え方があります。ガルトウングの考え方はそれとは違い、目標を一直線にまとめ置くのではなく、それぞれの当事者の目標となる地点を設定しながら、協同的かつ創造的に紛争の解決をめざすものなのです。たとえば、図のような二者間の例では、一方の目標を横軸の右の方に表し、もう一方のゴールを縦軸の上の方に表します。そして、その横軸と縦軸からなるグラフ表面の上には5つの基本的な解決法が見いだされるのです。

右の図を見ると、コンフリクトの解決された結果が5つの

典型的な位置で表されていることがわかります。これらの5つの解決方法についてみていきましょう。

A・B 一人勝ち（Win-lose game） 第1は横軸の右側、すなわち一方の目標だけを実現するやり方です。第2の方法は（第1の方法と同じ



く）縦軸の上の方の目標だけを実現するという方法です。これらはどちらも一方は満足しますが、もう一方には不満足な、さらには相手への憎しみが残る方法です。どちらも一人勝ちであり、力による紛争解決なのですが、火種は残り、のちにより深い紛争に発展する可能性があります。

C 撤退・先送り（Withdrawal） 第3のやり方は、対立を対立のまま放置する、対立がなかったことにする、あるいはまったく関係のない人の手に利益をゆだねて、二者の目標がどちらも実現できない場合です。実は、この方法は日常的によく用いられるやり方でもあります。たとえば、夫婦げんかなどで双方がカッカし、売り言葉に買い言葉で、言語的な暴力がらせん的に発展した状態になった場合などは、早急に結論を出さず、翌日落ち着いたときに話しあってみるなど、撤退・先送りは有効な場合も多いのです。しかし、国際紛争や宗教紛争など、放置しているあいだに問題が暴力的にエスカレートすることもあります。いずれにせよ、問題解決を直接避ける方略であり、二者とも不満が高まることも多いのが特徴です。

D 妥協／折衷（Compromise） 第4の地点は、二者の目標を斜めに結んだ、その中間点にあります。それは、両者の目標をそれぞれ半分ずつ実現するもので、妥協または折衷と呼ばれます。対立を綱引きのように考え、引き分けとする見方です。これも双方に不満が残り、次の紛争の火種が残る場合があります。真の紛争解決は、妥協点を見いだすことではなく、次に述べるように、超越点を発見することにより、双方が協同的な状態になることをめざすことです。

E トランセンドまたは超越（Transcend） 第5の地点は、図の右上の頂点です。この地点が「めざすところの解決点」と考えるのがガルトウングの紛争解決法といえます。そこでは、二者の目標を乗り越えた新たな創造的な解決法となっており、勝ち負け（ウィン・ルーズ）の競争的発想を超越した協同的発想です。このような解決法を生みだすためには、紛争当事者間の解決ではなく、第三者の導入が必要な場合が多いのです。

以上で、コンフリクトの解決された結果として、5つの典型的な位置を紹介しました。これら5つの解決法のうち、E、すなわち第5のトランセ

ンドの地点に到達することが理想です。そのための練習として、トランセンド法のワークショップでは、グループによるブレンストーミングを行います。ブレンストーミングとは、集団でアイデアを創造する討論方法です。①他の人の意見を批判しない、②たくさん出す、③自由奔放にアイデアを出す、④他の人の発言に便乗する、という4つのルールを守りながら、トランセンド的な解決法をめざして拡散的にアイデアを創出していきます。ブレンストーミングでアイデアを出し切ったあとではじめて、最良の選択肢を収束的に選びだすのです。



5 身体を使った対話によるトランセンドの実践=SABONAプロジェクト

解決方法を創造的に生成することは、対立的状況である場合にはむずかしいでしょう。たとえば、小学校で生徒同士の対立があった場合、どのような対話的方法が考えられるでしょうか？

その答えのひとつがSABONA（サボナ）にあります。SABONAはアフリカのズールー語で、「あなたを見守っていますよ」という意味だそうです。ガルトゥングは調停の実践者としての経験から、ノルウェーのファルデーレン氏とともに、国家間などのマクロレベルのコンフリクトの調停だけでなく、それを子どもから大人までの日常生活や教育にも応用できるように、SABONAプロジェクトを近年立ち上げました。

SABONAでは、過去と現在と未来を視覚化するために、足元に置くマット（写真参照）を作成して使用しています。そのマットは4つの領域に分かれていて、「過去」と「未来」という時間軸と、「ネガティブ」と「ポジティブ」という

SABONAマットの例



室井美稚子氏提供

敵対・共感の対立軸があります。この組み合わせにより、「ポジティブな未来」「ネガティブな過去」「ポジティブな過去」「ネガティブな未来」の4つに区切られたマットにのり、子どもたち自身が、身体を使って対話と移動とを交代して繰り返します。そのことにより対立している個人やグループの相互理解を促進し、関係性について考え、問題を明確化させ、最終的にはよい方向に変容させるねらいがあります。



6 現在のトランセンドの国外・国内での活動

このようなトランセンド法を推進するために「トランセンド・インターナショナル」（www.transcend.org）では、紛争転換実践活動、平和大学、書籍出版、メディアサービス、平和映像チャンネル、研究所など多彩な活動を行っています。

日本では、「京都YWCAほーぼのぼの会」と「トランセンド研究会」が協力しながらトランセンド法の普及と実践と研究を行っています。最近では、教育現場への導入を図るために「SABONAの会」を立ち上げました。また、雑誌『トランセンド研究——平和的手段による紛争の転換』も2003年から年2回のペースで発行されています。より深く知りたい方は、この雑誌や下記の文献を参考にしてください。

（いとうたけひこ）

参考文献

- ガルトゥング・伊藤武彦編・奥本京子訳『平和的手段による紛争の転換』（平和文化／2005年）
- ガルトゥング・藤田明史編『ガルトゥング平和学入門』（法律文化社／2003年）
- ガルトゥング・京都YWCAほーぼのぼの会『平和を創る発想術——紛争から和解へ』（岩波ブックレットNo603／2003年）
- 長谷邦彦他『SABONAマット教育ガイドブック』（SABONAの会準備会・YWCAほーぼのぼの会／2010年）
- 井上孝代編『コンフリクト転換のカウンセリング』（川島書店／2005年）
- 井上孝代『あの人と和解する——仲直りの心理学』（集英社新書／2005年）
- Aase Marie, Synove Faldalen, Vigdis R. Faldalen and Lars Thyholdt 2011 *SABONA: Searching for the Good Solutions - Learning Solving Conflicts*. Transcend University Press.